

2016年3月26日、函館―東京を結ぶ北海道新幹線が開通した。24年もの工事期間を費やして、青函トンネルが完成をみたのは1988年(昭和63年)で、同時に青函連絡船は80年の歴史を閉じることとなる。

函館港に設置されている青函連絡船記念館摩周丸を見学すると、当時の思い出がよみがえってくる。今では信じられないが、高所恐怖症であった私は、大の飛行機嫌いで津軽海峡を渡るのに4時間もかかる青函連絡船によ

台の1つだ。

この《丸惣旅館》を改築した《ホテル丸惣》の屋上で大学3年の夏休み、ピアガーデンをボーイとしてアルバイトしていたH君から、ピアガーデンに誘われた。悪友のN君、M君と連れだって屋上のピアガーデンを訪れた。入り口で中ジョッキの券を購入し、空いているテーブルを確保し、H君を呼ぶという段取りであった。テーブルの席に腰を下ろすや否や「おおい、ボーイ君」とH君を大声で呼んだところ、別のボーイが

## 北海道新幹線開通と 文学作品の舞台

情報広報部

橋本 洋一

「間違えました。皆で相談して、注文しますから。」とそれなりに落ち着いた態度でN君は対処した。場数を多く経験しているN君ならではの危機対処能力にただただ脱帽するだけであった。再度、「おおい、ボーイ君」とN君の声が天空に響き渡った。ついにH君の登場である。中ジョッキの券をH君に渡すや、大のビールジョッキと大皿のジンギスカン盛り合わせを持ってきた。まさに中ジョッキ券1枚でビール飲み放題、ジンギスカン食べ放題であった。夏休み中、このように中ジョッキ券1枚で食べ飲み放題を3

く乗船したものだ。船酔いをするたびにデッキに出て、海峡に吹く凄まじい冷たい風の中に身を置いて、船酔いからの回復を試みた。列車から連絡船へ移動する際に出す乗船名簿が犯人のアリバイのキーとなった松本清張の代表作《点と線》の舞台として青函連絡船が登場している。数年前にサイバー大学の卒業式で出向いた福岡市香椎(かしい)海岸が事件の発端の舞台として登場し、札幌の文人達の旅館として有名だった《丸惣旅館》も舞

回も満喫したのは、同級生の中で我々3人だけであった。

水上勉の名作《飢餓海峡》や三浦綾子の新聞懸賞小説《氷点》に登場する1954年(昭和29年)の《洞爺丸台風》の大惨事により、天候に影響されずに津軽海峡を安全に航行できる海峡トンネルへの期待が高まった。海峡トンネルの北海道側の吉岡の工事現場を見学する機会をたまたま得、また事故により片腕を失いながらも、工事の最前線で頑張っている方と出会った。これらの工事現場の方々の奮闘により、数々の異常出水による困難を乗り越えて、世界一の長さを誇る他に類例がない青函トンネルが完成をみた。

この完成から、すでに28年の歳月が流れた。今回の北海道新幹線の開通により、新函館北斗駅―鹿児島中央駅間が11時間台で結ばれ、日本列島の陸上ネットワークがさらに短縮される。2030年(平成42年)には札幌までの延長が予定され、日本列島全体が新幹線で結ばれることとなる。前倒し論への期待感もある中で、数多くの文学作品が過去の舞台を通して、映し出してきた《事実》の重さを想う時、名もない先達の人々の目に見えない奮闘努力にそと手を合わせたくなるのは私だけではないだろう。